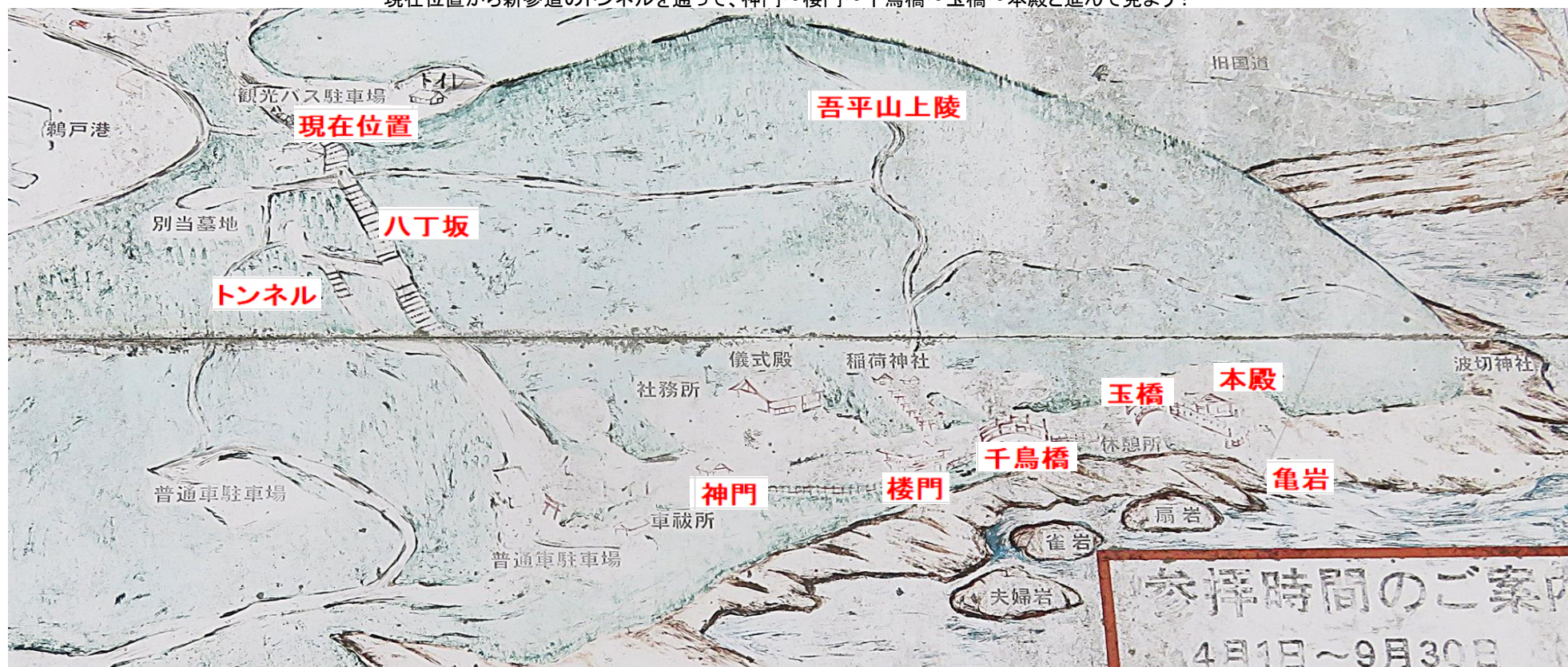


鵜戸神宮(日南市)

うど

現在位置から新参道のトンネルを通過、神門～楼門～千鳥橋～玉橋～本殿と進んで見よう！



創建は第十代崇神天皇の時代と伝えられている

 [video](#)



本参道の八丁坂ではなく、新参道のトンネルを潜って行く



参道を進むとここに出る/前方下はすぐ海だ！



前方が神門

[video](#)



神門の先に見えるのが楼門

[video](#)



楼門/台風による被害で修復中だった

[video](#)





国指定名勝 鵜戸 平成29年10月13日指定

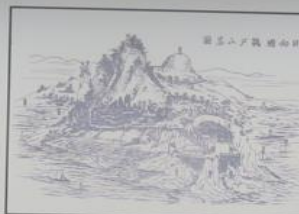
名勝鵜戸は、日向灘に突き出た岬で、古来より南九州各地から厚い信仰を受け、権勝の地としても栄えてきた。また、日向神話の海幸山幸神話の舞台として、鵜戸神宮本殿が建つ洞窟（海起海食洞）や亀石、お乳岩や蓮日臺（主祭神饒）周辺の玉依姫神社伝承地（宮浦古墳）などが伝えられている。

名勝の中核をなす鵜戸神宮は、南九州を代表する神社である。鵜戸神宮の社伝には延暦23年（804）に社殿を再興したとあり、近世には蘇忠清主伊東氏の息子の遺跡のもと造替や改修が行われた。明治維新までは、鵜戸山もしくは鵜戸大権現と呼ばれ、境内の仁王護国寺を仁和寺が所管し、神門に至る八丁坂参道の両脇には18の寺坊が並んでいた。

宮崎市青島から日南市風田にかけての日南海岸には、宮崎県群（約1200万年前から150万年前までの間、深い海底で砂の割と泥の層が交互に堆積した層）のなかでも古い時代の地層が露出しており、この砂岩泥岩互層が波の浸食を受けて形成された波食棚や海食洞、ノッチ（岩が窪んだ地形）が随所に見られる。鵜戸崎の南面に見られる波食棚は、鵜戸千畳敷奇岩（鬼の尻面）と呼ばれ、県の天然記念物に指定されている。

古からの自然景観と神話を背景とした鵜戸の地は、今も多くの人々から厚い信仰を受け、また、景勝地としても多くの人々を惹きつけており、古くからの旅行記や日記等にその様子が記されている。このような特徴的な地形及び地質によって形成された風致景観は、その観賞上の価値が高く評価されることから、平成29年10月13日、国名勝に指定された。

（国）教育委員会



所在地 日南市大字宮浦三三三番二外二十三筆号

国指定名勝 鵜戸

国指定名勝 鵜戸 平成29年10月13日指定

名勝鵜戸は、日向灘に突き出た岬で、古来より南九州各地から厚い信仰を受け、修験の場としても栄えてきた。また、日向神話の海幸山幸神話の舞台として、鵜戸神宮本殿が建つ洞穴（隆起海食洞）や亀石、お乳岩や速日峯陵（主祭神陵）、周辺の玉依姫陵伝承地（宮浦古墳）などが伝えられている。

名勝の中核をなす鵜戸神宮は、南九州を代表する神社である。鵜戸神宮の社伝には延暦23年(804)に社殿を再興したとあり、近世には飫肥藩主伊東氏の庇護のもと造替や改修が行われた。明治維新までは、鵜戸山もしくは鵜戸大権現と呼ばれ、境内の仁王護国寺を仁和寺が所管し、神門に至る八丁坂参道の両脇には18の寺坊が並んでいた。

宮崎市青島から日南市風田にかけての日南海岸には、宮崎層群（約1200万年前から150万年前までの間、深い海底で砂の層と泥の層が交互に堆積した層）のなかでも古い時代の地層が露出しており、この砂岩泥岩互層が波の浸食を受けて形成された波食棚や海食洞、ノッチ（岩が窪んだ地形）が随所に見られる。鵜戸崎の南面に見られる波食棚は、鵜戸千畳敷奇岩（鬼の洗濯板）と呼ばれ、県の天然記念物に指定されている。

古からの自然景観と神話を背景とした鵜戸の地は、今も多くの人々から厚い尊崇を受け、また、景勝地としても多くの人々を惹きつけており、古くからの旅行記や日記等にその様子が記されている。このような特徴的な地形及び地質によって形成された風致景観は、その観賞上の価値が高く評価されることから、平成29年10月13日、国名勝に指定された。

日南市教育委員会





反対側から見た楼門

[video](#)

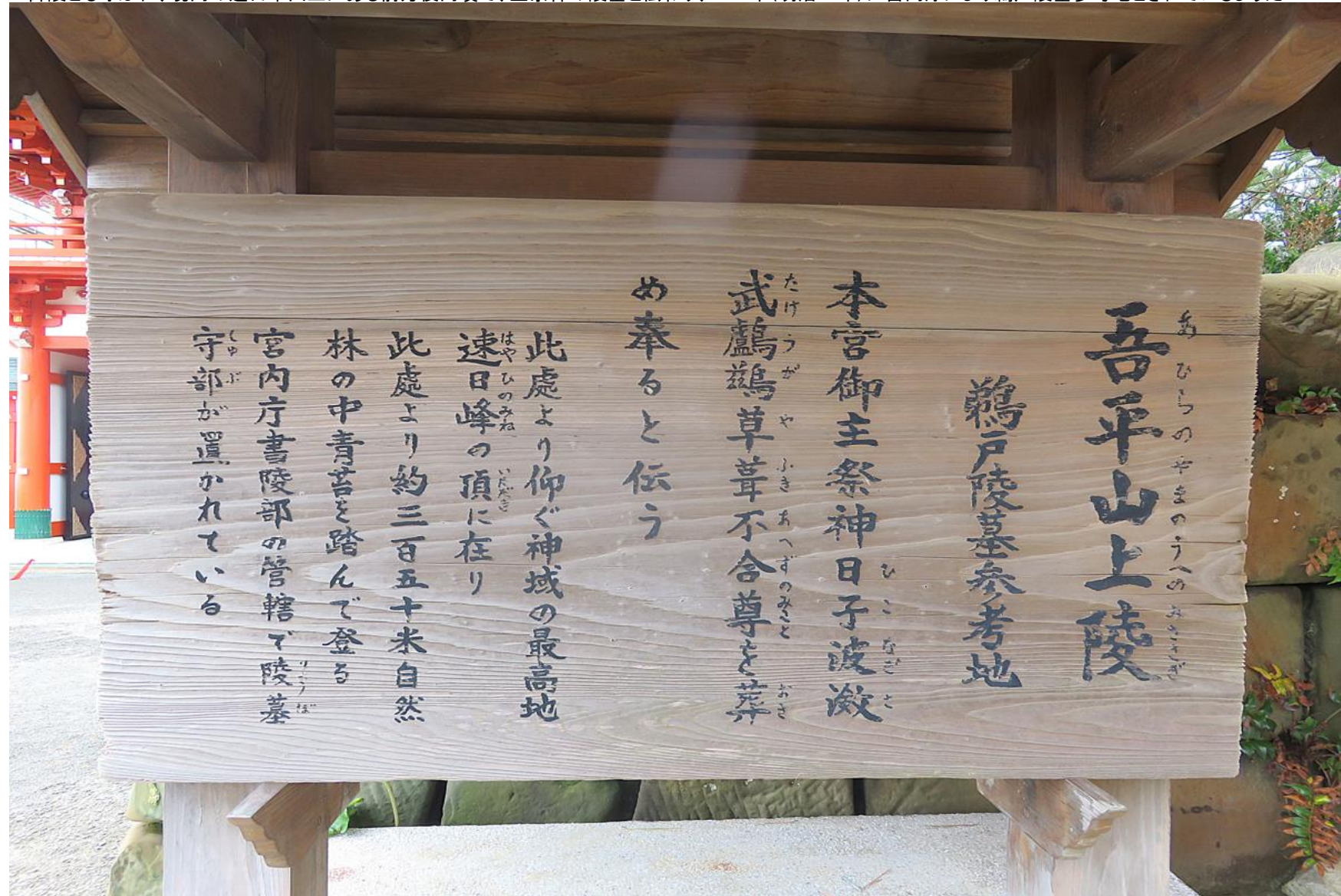


楼門の妻面を見たところ

[video](#)



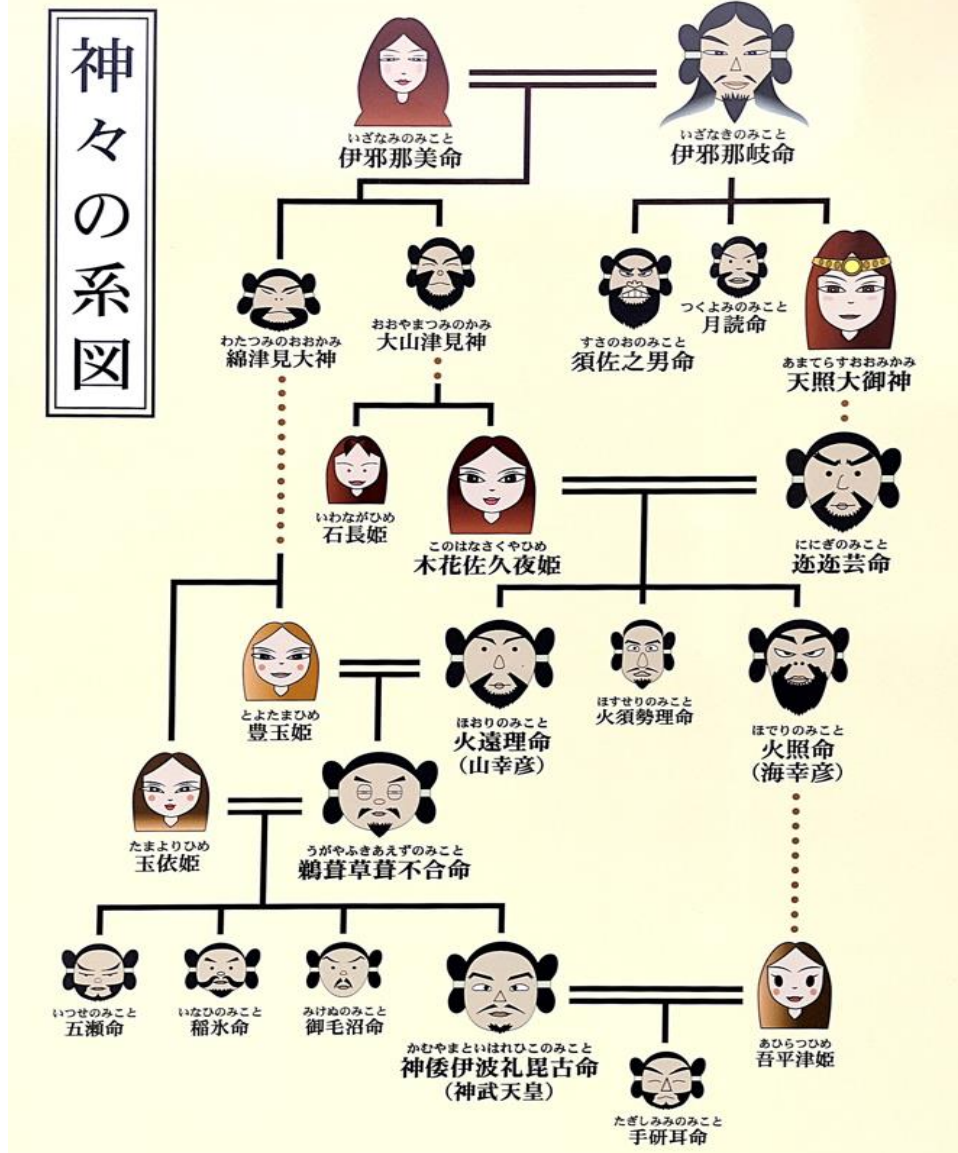
御陵とも呼ばれ、境内の速日峯山上にある前方後円墳で、主祭神の陵墓と伝わり、1896年(明治29年)に宮内庁により鵜戸陵墓参考地とされているようだ



「神武天皇御降誕傳説地 鵜戸」と刻まれた標柱が立っていた



主祭神は、山幸彦(火遠理命)と豊玉姫の子で、神武天皇の父にあたる鸕鷀草葺不合尊



千鳥橋

[video](#)



その先で右下を見るとこんな塩梅/鳥居が立っている先の岩窟の中に本殿が鎮座する

[video](#)



玉橋/神橋とも呼ばれる反橋

 [video](#)



神橋(玉橋・霊橋・鵜戸の反橋)

この神橋は神仏習合時代には金剛界三十七尊の御名が書かれた
三十七枚の板が配してありました

この神橋を渡ると御本殿に至る急な石段です。

これより先は古来より尊い御神域、霊場として深い信仰を集めて
まいりました。

かつては、橋の手前から履物を脱ぎ、^{はき}跣でお参りをしていました。
今はその習慣はなくなりましたが、その心は生かされています。

お参りの方々は御神慮にかなひ、心は清く正しく明き人として
祝福され、御加護を受けられるといわれています。

ようこそおいで下さいました。

この神橋と急な石段、どうぞ足元に注意して下りられ
ごゆっくり御参拝下さい。

鵜戸神宮社務所

それでは玉橋を渡って本殿へと進もう！

[video](#)



右下の本殿方向を見下ろしたところ



その右手を見たところ



更にその右手を見たところ



この急激な階段を下りて行く



群馬県の一之宮貫前神社、熊本県の草部吉見神社と併せて日本三大「下り宮」の一つに数えられているという

[video](#)



階段を下り切って、振り返って見上げたところ

 video



そこで、左手を見たところ

[video](#)



鵜戸神宮の奇岩 ～大地がつくった不思議な球体コンクリーション～

鵜戸神宮本殿の天井をささえる厚い岩盤は宮崎層群と呼ばれる地層のなかでも飛び抜けて厚い砂岩の層です。この岩盤には丸いボールのようなかたまりがたくさんふくまれています。これは、コンクリーションといい砂岩を作る砂粒が石灰成分でかためられたものです。コンクリーションは、ノジュール（結核）とも呼ばれ、長くその成因がわかっていませんでしたが、近年、コンクリーションをかためている石灰成分は生物由来だとわかりました。

鵜戸神宮一帯の地層は約800万年前の海底に砂や泥が堆積してできた地層からできています。当時、地震などで大量の砂が海底に供給されたときに、クラゲやナマコなどの海に暮らしていた生物が取り込まれたようです。これが微生物によって分解されるときに炭酸イオンをつくり、海水中のカルシウムイオンと反応してできた炭酸カルシウム（石灰成分）が周囲の砂岩をかためたと考えられています。（本殿裏の「お乳水」は、カルシウムイオンが溶けて硬水になっています。）

海洋生物やバクテリア、海底の砂などは、いつでもあるのですが、コンクリーションはこれらが絶妙な条件でそろったときだけにつくられたようです。約800万年も前の日向灘の海底でおこった珍しい出来事の記憶を、今もこの境内で見ることができます。

平成30年3月24日 NHK 総合テレビ「プラタモリ」にて放送

正面下は霊石亀石(亀岩)



アップで見たところ



それでは岩窟の中に入ってみよう！



これが本殿/権現造風の八棟造/正徳元年(1711年)に飢肥藩主・伊東祐実による改築/宮崎県指定文化財

 [video](#)







県指定建造物

鵜戸神宮 本殿

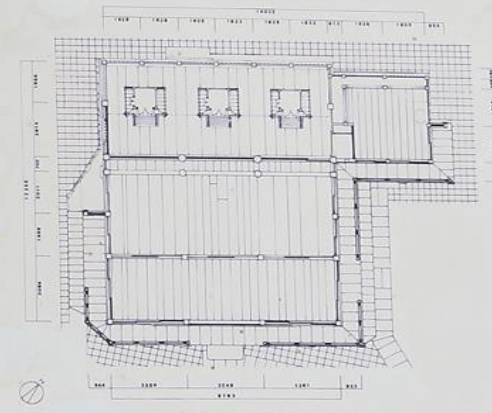
宮崎県教育委員会
(平成7年3月23日指定)



鵜戸神宮本殿



本殿 立面図



本殿 平面図

鵜戸神宮本殿は、鵜戸崎の日向灘に面した岩窟内に建てられている。

本殿創建の年代は不詳であるが、社伝によると崇神天皇の代に創建し、桓武天皇の勅命により、光喜坊快久が神殿及び仁王護国寺を再興した、と伝えている。中世には、「鵜戸六所大権現」、江戸時代以降は「鵜戸山大権現」として、日向国内外から厚い信仰を得ていた。

現在の本殿は、正徳元年（1711）に飢肥藩五代藩主伊東祐実が改築したものを明治23年（1890）に大修理を行い、さらに昭和42年（1967）に修理したものである。平成9年度（1997）には屋根や内装等の修理が行われた。このように幾度の改修を実施したものの、岩窟内に見事に収めた権現造風の八棟造は、往時のままであり、その文化的価値は高い。

説明板管理者／日南市教育委員会 電話0987-31-1145



これは「お乳岩・お乳水」



帰りは本参道の八丁坂で帰ろう！



鵜戸山八丁坂

鵜戸山の参拝路として、吹毛井側から上り
四三八段下り三七七段の合計八二五段からなる。
江戸時代には、すでに築かれていた。
参拝者の往還で中央部がすりへり凹んでいる。
石段の両側には仁王護国寺の支院があった。

(目南市指定文化財)



